様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 30 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１７３０４３０
研究課題名（和文）　ヨーロッパにおける暴動発生地区の実態と「領土的スティグマ化」の比較研究
研究課題名（英文）　Comparative study of processes of Territorial Stigmatization in European lower-class districts
研究代表者
森　千香子（MORI CHIKAKO）
南山大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10410755

研究成果の概要（和文）：
本研究はヨーロッパの暴動発生地区のメカニズムを把握するため、そこでみられる「領土的スティグマ化」(territorial stigmatization)の実態に注目し、そのプロセスを明らかにし、またそのコミュニティへの影響や、引き起こしている社会的帰結を経験的、かつ比較社会学的に明らかにした。具体的にパリ郊外とアムステルダム、マドリッドの荒廃地区の事例をとりあげた。

研究成果の概要（英文）：
Over three decades, several European societies - France, the United Kingdom, Spain, the Netherlands, Denmark, Belgium - have been affected by rioting. Rioting is very often the outcome of several factors in combination, such as poverty, unemployment, unsuitable and unsanitary urban development, growing discrimination, and worsening of relations between the police and residents. However, other explanations are possible and even necessary, as the effects of « Territorial Stigmatization » on local social structures analyzed by Loïc Wacquant, that propose a new and original paradigm about sparking off riots. Based on field observation in dilapidated sections of Paris suburb, Madrid and Amsterdam, this study assesses Wacquant's conception to analyze how the public disgrace afflicting these areas devalues the sense of self of their residents and corrodes their social ties.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：地域社会、マイノリティ、都市・郊外

１．研究開始当初の背景

①　第二次大戦後、高度成長期の西ヨーロッパでは生活水準が向上し、国内情勢が安定化

し、N.エリアスのいう「暴力的世界から平和な世界への変化」が進んでいるかのように見えたが、1980年代初頭からこの「文明化」神話を崩壊させるような暴力行為が、低所得層エスニックマイノリティ集住地区を中心に発生してきた。イギリスでは1981年夏以降ロンドン、リバプールをはじめ全国で暴動が発生し（Kundnani, 2003）、フランスでも1980年代から「暴動」が頻発し、2005年にも三週間にわたる「大暴動」が起きた(Mucchielli,,2006)。同様の事件は近年、スペイン（2000年2月、2007年10月）、オランダ（2007年3月、10月）、ベルギー（2008年3月）、イタリア（2008年9月）などでもみられている(Riots in European cities, Council of Europe, 2008)

②　このような衝突の原因や背景の解明を目指した研究は主に犯罪学と社会学の領域で行われてきた。犯罪学においては、セキュリティ対策の観点から暴動を起こす若者の性格や暴力に至る決定的要因など、個人的要因の分析が行われてきた。フランスでは、郊外の若者のモラル低下と非行増加を関連づけた研究(Body-Gendrot, 1993)や、警察や司法の「寛容主義」を批判的に考察する研究(Bauer, Raufer, 2001) などが行われ、政策提言も積極的に行われた。またイギリスでは、過去三十年間の暴動を総括した「暴動政策」の理論書(Waddington, 2007)などが出版された。

社会学においては「暴動」の集団的側面に焦点を定め、暴動の社会的要因の解明をめざした研究が行われてきた。フランスでは労働階級の没落(Mauger, 2006)や、格差拡大による希望の喪失(Beaud, Pialoux, 2005)などの観点から分析が行われた。イギリスでも人種差別とコミュニティ間の緊張の分析（Kundnani, 2003）や、社会的排除の分析(Bagguley, Hussain, 2008)から考察が進められた。その他にもオランダの移民二世と暴動の関係(Veenman, 2007)や、スペイン移民集住地区の民族対立(Coppola, Martin Perez, 2008) を扱ったものなど数々の研究が行われてきた。

③　以上の先行研究は、原因を人種・エスニシティの問題に探るアプローチ（主にイギリス）か、社会的格差・貧困に探るアプローチ（主にフランス）のいずれかに立っており、それ以外の視点からの分析や複合的視点からは少なかった。

これらの問題点をふまえて申請者は、暴動の背景には貧困などの社会的要因や人種差別だけでなく、都市周縁層が集住する「荒廃地区」に対する周囲のネガティブな視線があり、それを住民やコミュニティが内面化していることも大きな影響を及ぼしているのではないか、と考えるにいたった。

２．研究の目的

①　フランス、オランダ、スペインにおける荒廃地区の基本情報・データを収集し、共通点や相違点を整理して、比較分析の枠組みを構築する。まず三国の当該地区の現状を、社会・経済・政治、民族・都市空間などの多様な側面から把握し、その地区の歴史的形成の過程を理解する。

また国や自治体が、これらと都市周縁層の集住地区の問題をどのように認識しているのか、またそれに対してどのような取り組みを行っているのかを確認する。

②　調査対象地と周辺地区との関係を調べ、ロイック・ヴァカンの提唱する「領土的スティグマ（Territorial Stigmatization）」の実態を明らかにすることを目指す。

具体的には、これらの地区（とその住民）が周辺地区（とその住民）とどのような関係にあるのか、また、これらの地区がどう認識されているのかを、メディア分析や住民の意識調査から考察し、「領土的スティグマ化」のプロセスを検討する。

③「スティグマ化」がもたらす社会的帰結の検討ならびに分析をする。

具体的には「領土的スティグマ化」が住民の意識やコミュニティにどのような影響を及ぼしているのかを考察し、それが行政や周辺地区との関係など、より広い文脈においてどのような社会的帰結をもたらしているのかを「負のスパイラル」の観点から詳細に分析する。その上で行われている政策の問題点を再検討し、提言を行うための手がかりとする。

３．研究の方法

①　荒廃地区に関する先行研究や、調査対象地区に関する文献、基礎資料を収集し、その内容を精査する。そして基礎的な情報を把握した上で、現地の状況にきわめて詳しい海外協同研究者、協力者と議論を重ねることによって、本研究の問題分析の枠組みを構築、提示する。

②　フランス、オランダ、スペインでの調査地についての事前調査を行って、調査実施方法ならびに計画を確定し、それに基づいて現地調査を実施する。調査には海外協同研究者・協力者と相談しながら、彼らの協力を得て行う。

研究代表者がこれまでも継続的に調査を行ってきたパリ郊外との比較研究の対象と

して、オランダ・スペインの両地区を選んだのは、パリ郊外との共通点・相違点が極めてはっきりしており比較に適切だったからである。

③　②の調査で得られたデータの整理（主にテープ起こし）を行い、得られたデータの分析を行う。データの分析に関しても、インターネット会議を通じて、海外協同研究者・協力者と議論しながら進めていく。また①で得られた情報と②の分析をあわせて、さらに分析を精査する。必要に応じて追加調査を実施し、その調査結果を整理して、最終的な分析・検討を加える。またヨーロッパ港は移築研究の関連領域の専門家とも意見交換を行って、成果をまとめる。

４．研究成果

①　パリ郊外（ローズ・レ・ヴァン地区）、アムステルダム（スローテルファールト地区）、マドリッド（テトゥアン地区）という三国の荒廃地区の基本情報・データ収集を行い、共通点や相違点を整理して、問題設定の枠組みの基盤構築を行った。
　三地区は歴史的経緯などは異なるものの、いくつかの社会学的特徴を共有していることがわかった。それは貧困、失業、学業挫折率の高さ、建築物の荒廃、人種差別、住民と警察の間の緊張関係などであった。

②　①をふまえながら、現地調査を行い、三地区の現状を、社会・経済・民族・都市空間などの多様な側面から把握した。三地区は歴史的形成の過程については大きく異なる部分が散見されるが、国や自治体がこれらの地区の「様々な社会的・経済的問題が堆積する問題空間」として認識し、様々な対策をたてているが、実際にそれらの政策が社会政策的なものから、治安対策的なものに移行し、またそれに当てられる予算も削減される傾向がある、という点は三地区に共通する問題であった。
　以上のような三地区の相違点を海外共同研究者・協力者との議論・分析を通して整理し、三地区の比較研究に有効な、理論的枠組みの構築を行った。

③　調査対象地とその周辺の地域社会との関係を、現地調査を通じて調べ、そこで進行している「領土的スティグマ」の実態を明らかにした。
　調査を実施した三地区は社会的背景や歴史的プロセスの面で異なる点が多いにも関わらず、これら三地区のいずれにおいても、調査対象地区が周辺の地域（とその住民）から「誰も足を踏み入れられない」「近づきたくない」などきわめてネガティブな空間として認識されており、これらの地区が地域社会において孤立し、浮き立った状態におかれていることがわかった。
　そしてこのような地域への否定的なイメージが、そこの住民に対しても同様のイメージの形成につながっており、それが「地域」と「その住民」の表象間に相互作用を生み出し、互いが互いを強化しあい、その空間／領土に対する「スティグマ化」のプロセスが発生していることがわかった。

④　このような「領土的スティグマ化」は③で示したような、特定の地区とその住民に対する否定的なイメージの形成にとどまらない。
　「領土的スティグマ化」は、そのプロセスにおいて、その地区の住民に対して外部から否定的イメージが押し付けられるだけでなく、地元の住民自らも、このようなイメージを内面化し、自己否定する傾向がみられることがわかった。
　つまり、自分の暮らす地区や同じ地区に暮らす住民に対し「誇り」などの肯定的イメージをもつことができず、むしろ「恥」「嫌悪感」などといった否定的な意識を内面化しているという実態が明らかになった。

⑤　④でみたような否定的な地区のイメージの内面化は、隣人など同じ地区で暮らす人々との団結力を失わせ、また敵対心などを生み出していることがわかった。
　そしてこのような現状が結果的に、当該地区のコミュニティ内部で比較的諸資本を多く所有する層の外部流出を招いており、さらにそれがコミュニティ自体の弱体化や解体を促している。以上の状況が重なることで、さらに当該地区のスティグマ化が強化されるという「負のスパイラル」のプロセスを明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）
①　森千香子「フランスの移民と左派―共闘の条件と課題」『移動と革命』論想社（印刷中、2012 年 7 月刊行予定、査読無）

②　森千香子　「現代社会における貧困と排外主義」『反貧困 in あいち論集』、反貧困ネット、2011 年９月、査読無

③　森千香子　「フランスにおけるカルチュラル・スタディーズの受容と背景」、『唯物論研究年誌』第 15 号「批判的〈知〉の復権」、青木書店、2010 年 10 月、pp.201-221.（査読有）

④ Chikako MORI, Écrire en banlieue: analyse des pratiques d'écriture chez les jeunes issus des immigrations postcoloniales en Ile de France、Thèse de doctorat en sociologie、Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS), 2010 年 9 月（博士論文、査読有、A4 判・ 368p.）

⑤　森千香子「フランスにおけるもう一つのレイシズム」、『インパクション』174 号、インパクト出版会、2010 年 5 月、pp.120-129.（査読無）

⑥ “Visibilisation et stigmatisation des « cultures de banlieue » en France”、『ヨーロッパ研究センター報』16 号、南山大学ヨーロッパ研究センター、2010 年 3 月、pp.43-60.（査読無）

〔学会発表〕（計 20 件）

①　森千香子　講演会「なぜ移民はやって来るのか？」2011 年 12 月 22 日　青山学院大学

②　森千香子　「都市空間の変容と『共生』への新たな課題」トランスナショナル研究会、2011 年 10 月 12 日　名古屋市立大学

③　森千香子「現代レイシズム論」、シンポジウム「現代日本の排外主義とヘイトクライム」、2011 年 10 月 9 日　同志社大学

④　森千香子「郊外の若者の『社会不参加』と『脱政治化』を再考する」、シンポジウム「移民の社会的統合と排除」、 2011 年 7 月 23 日、明治学院大学

⑤ 森千香子「パリ圏における都市再生と新たな「共生」問題」2010 年 11 月 25 日　学習院大学

⑥ 森千香子　「1990 年代以降のパリとその郊外の都市空間の変容と社会的影響」社会情報システム研究会、2010 年 11 月 19 日、名古屋大学

⑦　森千香子　「フランス郊外と『移民』の政治参加をめぐって」シンポジウム」「移民の社会的統合と排除」、2009 年 9 月 19 日、明治学院大学

〔図書〕（計 2 件）
①　森千香子「多文化社会における反レイシズム文化構築の地平」『つながる――社会的紐帯と政治学　政治の発見第四巻』、共著、2010 年 10 月、風行社 (pp.86-115)

②　森千香子「郊外コミュニティにおける『移民』の社会的排除と参加」『移民の社会的統合と排除――問われるフランス的平等』、共著、2009 年 6 月、東京大学出版会 (pp.125-148)

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
森　千香子（MORI CHIKAKO）
南山大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10410755

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：